

花王教員フェローシップ『太平洋北西部のサケ』体験報告

報告者：内山 雅世（千葉県浦安市立明海小学校教諭）

調査日：2005年8月13日～8月19日



1. プロジェクトの内容と体験、それらを通して感じたこと（・太字斜体）

8月13日（土）集合（ボランティア：U.S.A. 4人、日本2人、ベルギー1人）

パワーポイントによるプレゼンテーション（ラルフによる概要説明）

リバーフェスティバル&パウワウ（ネイティブアメリカンの儀式）を見学）

・フェスティバルを通してサケを大切にしている気持ちが伝わってきた。（砂のオブジェ・飾等）

宿舎（ダーリントン）に移動

ダーリントンそばの川にてウェルダの使い方に慣れる

・川が濁っていたので不思議に思う。氷河の影響だと聞いた。

調査法を学ぶ（幹の年輪、樹木の周囲、起伏調査

勾配の測定・コンパスの使い方・レーザー等）

氷河で壊された橋や材木工場の見学

・調査法は、話だけではよくわからなかったが、実際に行くことにより理解できた。

・車内で、少しずつ近くに人と話をする。もっと英語を勉強しておけばよかったと後悔した。



パウワウの様子



8月14日（日）調査開始

Sloan creek forest plotにて13日の調査を実践する

午前は樹木の周囲、ナンバープレート付け

午後は川の起伏調査

・昨日の調査を教えていただいたときわかったつもりだったが、間違えていたところもあった。水がとても美しく澄んでいる。

美しい川の中で実際に泳ぐ（水温がとても低かったが）

・とても水が冷たかった。



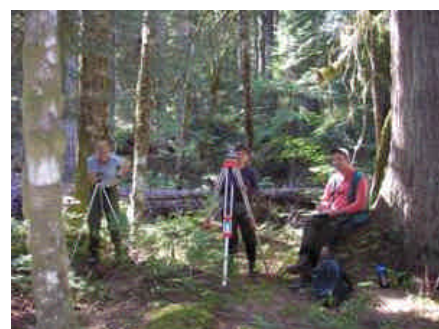
8月15日（月）14日と同じ場所で調査

午前は倒木の調査（倒れている向き・長さ・勾配）

午後は年輪を繰り抜く作業

・昨日行った作業なので、比較的行いやすかった。

・倒木の調査は内容は簡単だが、測定するために動くのが大変だった。



・水がとても澄んでいたので、水中カメラで画像を撮った。

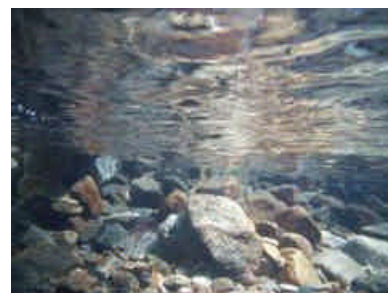
帰りに滝を見に行く

日本食を作って全員で食べる

・カレー・味噌汁・ソーメンを作り食べる。

思っていた以上に日本食への抵抗が少なく驚く。

次の調査地と調査法と宿舎のプレゼンテーション



8月16日(火) 清掃

宿舎移動 (アンの家)

魚卵孵化場見学

・幼魚にナンバーリングをするのを見て驚く。

・実際に川の中を泳ぐ大人のサケを初めて見て感動した。

・ラルフのように生育環境の改善を考えてサケを増やそうとする人だけでなく、殖やす手伝いをする人もいることを知る。どちらの方もサケを増やそうと努力を惜まない。

Mt. Sauk をハイキング

スカジット川 (緑) と Sauk 川 (灰色) が交差するのを山の上から見る

氷河によって曲がって育った樹木を見る

Mt. Baker を見る

・単なるハイキングではなく、ラルフは川の交差、自然のすばらしさを伝えたかったのだと思う。

コンクリートそばの川に寄り、泳ぐ

アンの家に着き、敷地内の Creek で次の調査法の練習 (川幅・最深値・流れの出る場所の水深・距離の測り方等)

・アマンダ (研究助手) に調査法を再度教えてもらおう。絵をかいてもらいながら教わった。とてもわかりやすかった。

・とても小さな川なのに、サケの幼魚がたくさんメダカのように泳いでいた。自然がいっぱいなのだと感じた。



8月17日（水）午前中は雨だったので、データ入力と年輪数え

・1番辛い作業がこの年輪数えだった。

キャンプ場そばの Klahowya Creek を調査

16日に学んだ、川幅・最深値・流れの出る場所の水深・距離の測り方を実際に行う

・2チームに分かれた。ジェニファーが草木を切り開いてくれた。その後を調査。とてもたいへんだった。途中、生えているワイルドベリーを食べた。とてもおいしかった。

西部劇に出てきそうな街に寄る

メキシカン料理をごちそうになる



8月18日（木）調査最終日

Jordan Creek を調査

16日に学んだ、川幅・最深値・流れの出る場所の水深・距離の測り方を実際に行う

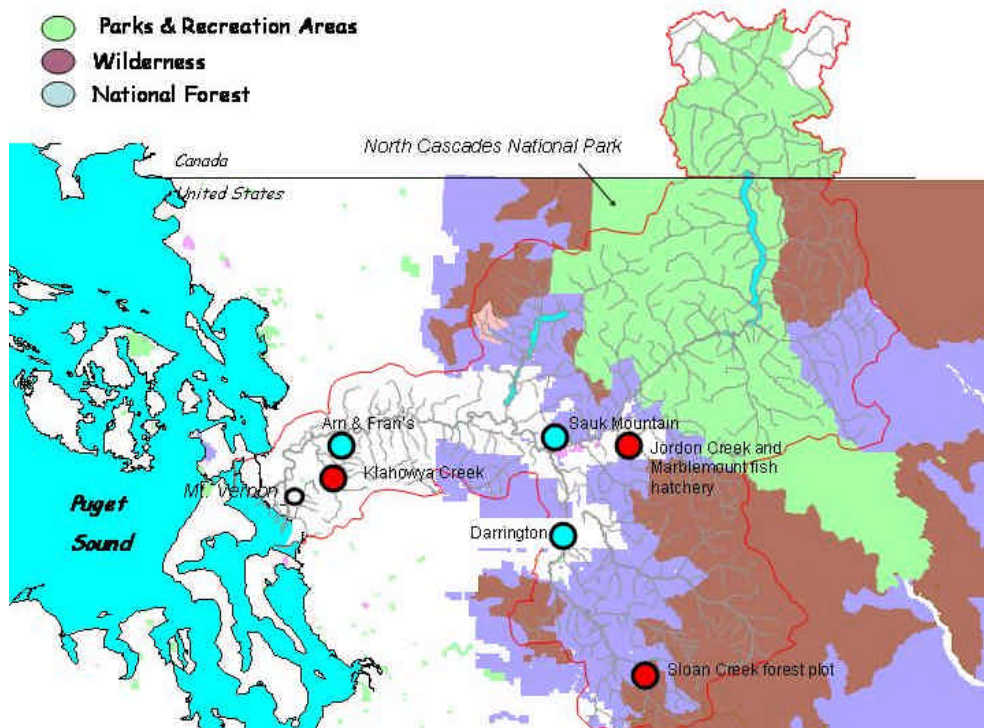
・今までで1番流れが強く、勾配がきつかった。しかし、景色がとてもすばらしく疲れが飛んだ



8月19日（金）別れを惜しみながら解散（シアトル2人、アナコルタス2人、現地解散3人）

解散後、たまたま行程が一緒だったキャリーとアナコルタス（港）に向かう。

フェリーにてサンファンアイランドへ。



2. 学んだこと

①自然を大切にしようとする人々の気持ち

・実際に自然を大切にしたいという気持ち、少なくなってしまったサケを増やしたいという気持ちが伝わってきた。

②さまざまな角度からリサーチを行う姿勢

・サケの生育環境を生育地だけでなく、さまざまな角度から見るができるようプログラムを組んでくださっていた。休憩時間の楽しみのためのリバーフェスティバル、ハイキング、川での水泳、滝見学がすべてつながっていると感じた。

③自然を保全、修復することは難しいこと

・1度壊されかけた自然や壊した自然を取り戻すためにはたくさんの時間と労力が必要だということがわかった。

④ボランティアとは何か

・ボランティアは単なる調査のお手伝いではない。調査や共同作業・生活を通して、自分たちの職場、生活に戻ったときに何ができるかを学んだ。

⑤日本とアメリカの習慣や生活の違い

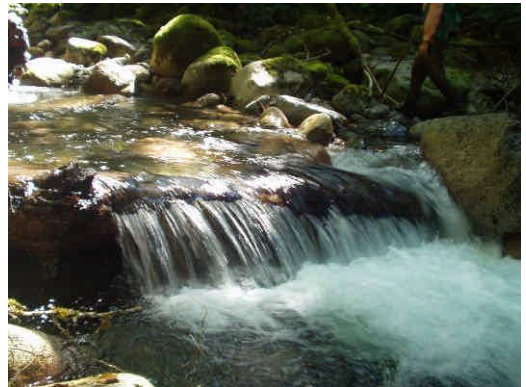
・初めてアメリカ、英語を使う生活圏に行ったが、驚きの連続だった。特に感じたのは、相手をほめることの多いことだった。私が失敗したときに、「No problem!」[It's O.K.]と言われたとき、私はクラスの子どもたちにそのようにしていただろうかと思った。また、ハンディを持った人が普通に暮らせるシステムと人々の思いやりはすばらしいと思った。

3. 学校の子どもたちに何ができるか?

①授業としてできること

・総合的な学習の時間を通して次の2つが考えられる。
「大自然との出会いを通して」

今回のリサーチを通して、大自然のすばらしさを体感した。森林の力強さ、氷河に負けずに伸び行く樹木、必死に上流目指して泳ぐサケ…。テレビや本でしか知らなかったことを実際に見て、自然の力強さを感じた。



「自然環境の保護」

リサーチの中で、人間が壊した自然と自然が壊した自然の両方を見た。壊すことは一瞬でできることだが、直すことはとてつもない時間がかかる。また、労力も必要だ。今私たちができることは何か考えていく学習を組みたい。

②授業以外でできること

・主任研究者のラルフの姿を見て、私たちに本の教員に欠けている部分を教えていただいた気がした。リーダー自ら声かけではなく実際にやってみる大切さを再認識した。



遊びにも仕事にも1番に始め、楽しんでいたラルフの姿勢を学校でまねしていきたい。」

- ・ 宿泊所を提供してくださったアン、研究助手のアマンダの行動も感謝したい。いつも笑顔で教えてくださった。その気持ちを受け継ぎたい。
- ・ 英語の勉強をもっとしておけばよかったと私自身悔やんだ。国際理解の第1歩として、英語学習の大切さや世界が広がるすばらしさを伝えたい。
- ・ ボランティアチームのみなさんの強い気持ちを感じた。日本でもがんばりたいと強く思った。
- ・ 自ら進んで行動を起こすことや、未知の世界へ飛び出す勇気の大切さを伝えていきたい。

4. 最後に

この教員フェローシップを通してのアースウォッチのボランティア活動への参加は、とても有意義だった。応募締め切り直前まで応募しようかどうか悩んでいたが、思い切って応募してよかったと思う。今まで海関係のボランティアに参加したことはあるが、山や川に関するボランティアは初めてだった。英語力にも自信がなかった。

実際に調査が始まってからは、不安が吹き飛んだ。ラルフのすばらしいリーダー性、言葉ではなく行動で示してくれるところ、楽しもうという気持ち、すべてが私にとって助けになったり勉強になったりした。また、事前にラルフが前のチームの調査風景をメールで送ってくださり、言葉や文だけではわからない不安が解消された。

また、一緒にボランティアチームだった真・キャリー・ジェニファー・ゾービック・セーラ・シルビアとの国際交流もとても楽しかったし、国ごとの考え方や文化・習慣の違いがわかり興味深かった。とても素敵な友達が世界にできた。常に心配してくださった森川さんにもとても感謝している。ありがとうございました。

